

板と申候茶巾、茶入の小蓋は此板にのせ、ふた置も板の上前ノ左ノ角ニ置テ柄杓を引也、此仕方後取違ひ、風爐の小板に置也、半板には置、小板には無用、半板に茶杓は利休も置不申候と仰川○細齋也。

〔古今茶之湯諸抄大成六〕一相阿彌の物數寄の水板は、長板のごとき物也、大日の爐に飾りても、おもしろき物也、

水板寸法

長貳尺一寸 幅九寸 アツミ七分 兩のはしに、うらはしばみをいれたるもの也、

足板飾合の圖○圖略

一此足板も古實ノ物なり、これも紹鷗の日記にみえたり、世上に沙汰なき事ゆへ此書にいたす、板の形は文臺のごとき物也、足四角にあり、○中略

足板ノ寸法

一幅一尺 長二尺一寸 高サ一寸八分 足ハ四角ノ角に付 板ノアツミ三分半 木は澤栗ノ白木なり

〔茶道望月集七〕一長板と云物あり、其寸法は前にいふごとく、是は臺子の四本柱を取て、天井板もなき物也、さあれば臺子の地板計と可心得、古人是を物數奇たる心は、臺子は前にもいふごとく極真の物ゆへ、道具万々心安が爲、如此になしたる物とは可知、○中略

一此四方板といふは、前に云ごとく長板を二ツに切て四方になしたる物也、是又長板よりは侘の爲に物數奇て、是に紹鷗は奈良風爐のおつぼ形とて、小キ風爐に端釜の石目蓋成を、透木にて被用しと也、

〔倭訓栞前編 二十六〕ふろ 風爐と書り、茶爐也、奈良風爐あり、西土にいふ運泥爐にして土風爐也、